OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語複合動詞の研究 : 意味と統語のインターフェイス
Author(s)	池谷, 知子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51190
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	池 谷 知 子
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第 41 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	日本語複合動詞の研究―意味と統語のインターフェイス―
論文審査委員	主 査　教 授　三 原 健 一
	副 査　教 授　杉 本 孝 司
	副 査　助教授　田野村 忠 温
	副 査　教 授　仁 田 義 雄
	副 査　教 授　小矢野 哲 夫

論文の内容要旨

従来の先行研究において複合動詞は形態論，統語論，意味論的立場からさまざまな検討がなされてきた。しかし，複合動詞がどの部門で形成されるのかという最も基本的なことですら，未だ統一的見解に達していない。

現在，日本語の複合動詞において最も広く受け入れられている分類は影山（1993）で提案されているモジュール形態論である。モジュール形態論では，複合動詞には語彙部門で形成するものと統語部門で形成する2つのタイプがあると考え，複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞という2つに分類した。

影山（1993：75）

A類（＝語彙的複合動詞）

飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放つ、飛び込む、（隣の人に）話しかける、こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒らす、誉め讃える、語り明かす、聞き返す、震え上がる、呆れ返る、持ち去る、沸き立つ

B類（＝統語的複合動詞）

払い終える、話し終わる、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、助け合う、動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、数え直す、見なれる、登り切る、やりつける

影山（1993）では，語彙的複合動詞は語彙部門（Lexicon）で形成され，統語的複合動詞は統語部門で形成されるとした。そして，5つのテストを通じて，語彙的複合動詞と

統語的複合動詞は明確に区別されるべきものだとし，中間的なものは存在しないとした。しかし，その後の様々な研究者によって，語彙的複合動詞の中にも高い生産性を持つものや，統語的複合動詞にも，語彙的複合動詞の特徴を持つものなど，中間的な位置に属するものがあることが指摘されている。

影山（1993）の問題点として大きく２点があげられる。

・語彙的複合動詞と統語的複合動詞の位置関係はどうなっているのか。

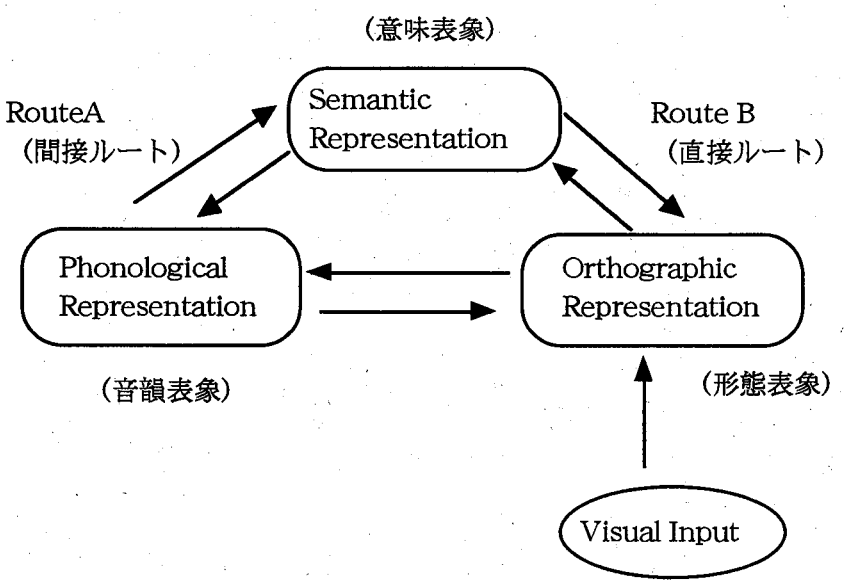
・語彙的複合動詞と統語的複合動詞の中間的なものをどのように扱うべきか。

影山（1993）では，語彙的複合動詞であっても，「並列関係」（例　泣き叫ぶ）「様態・手段」（例　押し開ける）「付帯状況」（例　飲み歩く）のように，Ｖ１とＶ２の間に意味的な関係を想定していた。そのため「落ち着く」「付き合う」「見つける」のように，完全に一語化しており，Ｖ１とＶ２との間に個々の意味解釈ができないものは考察の対象から外されていた。また，多くの複合動詞は多義であるが，語彙的，統語的という二分法では複合動詞の多義性が上手くとらえられていない。例えば「見返す」という語には，「昔あなどられていた相手に，立派になった姿を見せつける」「もう一度見直す」「見られたことに対して，こちらも相手を見る」「振り返ってみる」という４つの意味があるが，影山（1993）のモデルでは，このような多義の意味がどうやって決まってくるのかが説明できなかった。

本研究では，複合動詞は「新語」を創造する操作であり，そこで創造された「新語」はその形態（ユニット）全体で脳内辞書（メンタルレキシコン）に登録するのと同時に，Ｖ１ とV2 という別個の形態に分解された形でも登録されると考える。つまり，複合動詞は「語」として作られるという「語彙性」と，それが２つの形態に分解できるという「規則性」を両方兼ね備えているのである。

現在，脳科学において，脳内辞書（メンタルレキシコン）における，意味のアクセスがどのように行われているかという研究が盛んになってきている。その中で門田（2003）などによって「二重アクセスモデル」というモデルが仮定され，その存在が確認されつつある。

＜図１＞　二重アクセスモデル　門田編（2003：109）（　）は筆者による注



「直接ルート」

文字ユニット全体から，それに相当する語の意味をメンタルレキシコンから検索する

「間接ルート」

文字ユニットを形態的に分解，分析し，その後に意味を検索する

「二重アクセスモデル」の特徴は，意味へのアクセスに「直接ルート」と「間接ルート」という２つの経路を設定したことである。本研究でもこのモデルを支持し，複合動詞を完全に語彙化した分解不可能なものと，Ｖ１とＶ２に分解可能なものに分類した。そして，「直接ルート」で出されるような，完全に語彙化した複合動詞が持つ意味を「レベル０」の意味とした。

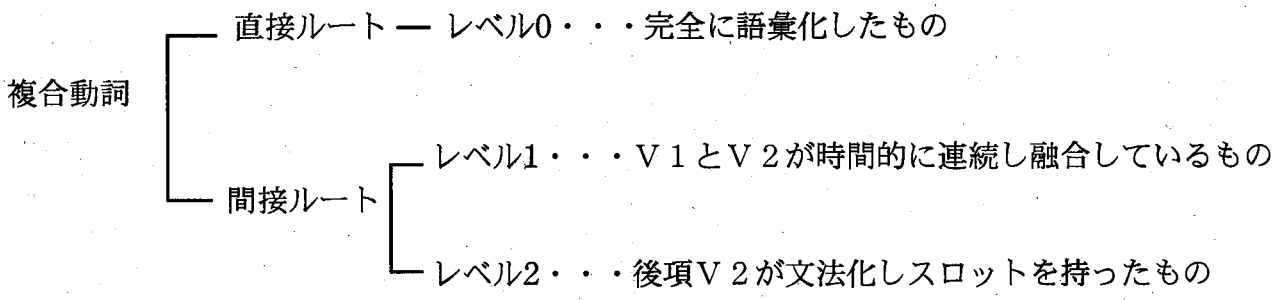
このモデルのメリットは，影山（1993）で切り捨てられていた完全に語彙化している複合動詞が上手く複合動詞の体系の中に位置づけられるだけではなく，規則に従って分解，分析することによって産出される意味と，脳内辞書（メンタルレキシコン）にそのままの形で登録されている語彙的な意味の位置関係がはっきりすることである。

また，複合動詞は，本質的に多義になりやすく，「見返す」のように複数の意味を持つことも珍しくない。多義である「見返す」のような語を見た時，多くの話者が「昔あなどられていた相手に，立派になった姿を見せつける」という複合動詞全体が語彙化した「レベル０」の意味を最初に思いつき，その後で分析的な用法の意味を思いつく。「二重アクセスモデル」は形態的に分解する手順が必要ない分，「間接ルート」より「直接ルート」で出される意味の方が早く産出されるとされており，これによって，完全に語彙化してい

る意味の方が早く産出されるという時間差の理由も上手く説明できるようになる。

本研究では「間接ルート」の下位分類として，完全に文法化（Grammaticalization）してＶ２が複合動詞になるための「スロット」を持ったものを「レベル２」，まだ，そこまで文法化が進んでいないため「スロット」を持っていないものを「レベル１」に分類した。このように本研究では複合動詞を「レベル０」「レベル１」「レベル２」という３つのレベルに分類する。

＜図２＞複合動詞のレベル

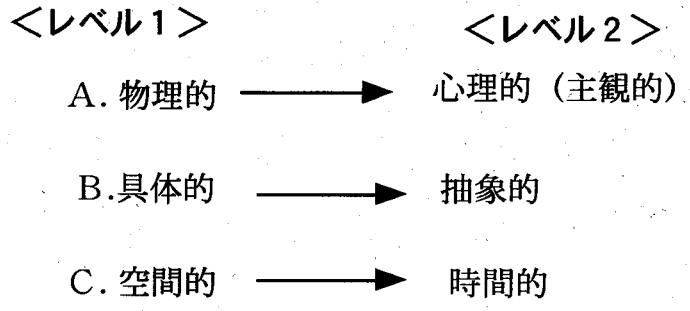


「直接ルート」と「間接ルート」は，対象となる複合動詞が語彙化しているかどうかで通過する経路が大きく異なってくるが，「見返す」でみられるように，両方の意味を持つ複合動詞も少なくない。そこで，「間接ルート」の下位分類である「レベル１」「レベル２」を分ける基準として２つのテストを提案した。「レベル１」の複合動詞を認定する基準としては，Ｖ１とＶ２が時間的に連続していることを確認する「テ形」テストが有効であった。また，「レベル２」の複合動詞を認定する基準としては，複合動詞が複合動詞になるためのスロットを持っているかどうかを確認する「する/やる」テストが有効であった。このように一定の基準を設けて，「レベル１」と「レベル２」を分類したが，これらの違いは文法化（Grammaticalization）の程度の違いであり，段階的なものである。

本研究では文法化（Grammaticalization）を促進する要因として，「①語用論的推論（Pragmatic inference)」「②漂白化（Bleaching ）」の２つがあることを仮定し，それが実際の複合動詞内においてどのように働いているかを検証した。

「語用論的推論」による文法化には次のような３つのモデルを想定した。これらは独立して働くものではなく，複数が同時に働く場合もある。また，これらは段階的なグラデーションがあるもので，すべてのものが「レベル１」から「レベル２」の意味になるわけではない。文法化の度合いによっては，「レベル１」の中でおさまるものもある。

＜図３＞　文法化のモデル



このモデルを使用して，実際に「～あげる」の意味を分析すると次のようになる。まず、「～あげる」は以下のような意味を持っている。

＜位置移動＞
①具体的な移動・・・押しあげる，蹴りあげる，担ぎあげる，取りあげる，持ちあげる
②抽象的な移動・・・見あげる，追いあげる
＜動作の完了＞
③書きあげる，編みあげる，塗りあげる，作りあげる，洗いあげる，歌いあげる

一番，文法化の度合いが低いのが「具体的な移動」を表す①の「押し上げる」である。この「レベル１」の意味しか持たない「具体的な移動」に文法化モデルを当てはめることにより，多義の意味が生まれることが説明できる。

まず，①の「押し上げる」は「B.具体的→抽象的」という文法化の働きをうけて，具体的な移動からその方向性だけ残して②の「見上げる」のような抽象的な移動を表すようになる。

次に「C.空間的→時間的」という文法化の働きをうけて，「上げる」という空間的な移動から時間的な移動を表すものへと変化し，さらにこれらは③の「書き上げる」のようなアスペクトを表すようになる。

最後に「A.物理的→心理的（主観的）」の働きをうけて，主観性が増大する。つまり，「～あげる」は単なる完了ではなくて，「良い」という評価性を含むようになる。そのため，「きれいに書き上げた」ということはできるが「＊汚く書き上げた」ということはできない。このように，「～あげる」は「A」「B」「C」の３つの方法で文法化されていると説明することができるのである。

もう１つの文法化を促進する要因である「漂白化（Bleaching）」の例として，「追い

かける」の前項Ｖ１が「追っかける」のように促音便化するものをあげる。これらは音韻的条件により音便化したものが，意味の漂白化（Bleaching）をうけ，本来の意味を失っていくことを示している。その結果，これらは接辞化し，「おっ」という形式で新たな生産性を持ち，「おったまげる」「おっぱじめる」のように，元の意味からの予測を越えたＶ２と結合するようになることを証明した。

複合動詞は，複雑な状況を述べるために新しく作られた語であるという「語彙性」と，それが形態的に複合形式を取っているため分解・分析できるという「規則性」の２つの側面を持っており，その２つがぶつかり合う統語と意味のインターフェイスである。程度の差はあれ，多くの複合動詞がこの両面を持っており，この２つを切り離して複合動詞を分析することは不可能である。従来の先行研究では，この「規則性」ばかりが取り上げられ，複合動詞の「語彙性」が省みられることは少なかった。それに対して，本研究の提案する「二重アクセスモデル」で複合動詞を分析することによって，複合動詞の「語彙性」と「規則性」が上手くとらえられ，多義性を獲得していく過程が明らかになった。また，このモデルは脳科学でもその存在が明らかになっているモデルであり，これにより，脳科学で提案されていることが言語学的にも妥当性があることを確認できた。また，複合動詞の意味の変化は，文法化（Grammaticalization）という一般的な現象に還元できることを明らかにしたことによって，今後，複合動詞を他の文法現象と平行して論じることが可能になり，日本語の体系を解明する手がかりになることを確信している。

論文審査の結果の要旨

日本語は複合動詞を生産的に用いる言語であり、日常的な使用頻度も高いため、形態論、統語論、意味論の諸領域において先行研究も多数に及ぶ。その中で理論言語学の分野では、現在最も広く受け入れられているものの1つに、モジュール形態論の立場を取る影山(1993)がある。影山は、複合動詞には語彙部門で生成される語彙的複合動詞と、統語部門で生成される統語的複合動詞の2類があるとしている。(以下、前項動詞をV1、後項動詞をV2と表記する。)

語彙的複合動詞：　飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ等

統語的複合動詞：　払い終える、喋り続ける、助け合う等

前者は、統語部門に入力される際には既に1語の動詞となっているため、語の緊密性(word integrity)の制約を受け、V1 のみを、「そうする」で置き換えたり受動形にしたりすることが出来ない。他方、後者は、V1/V2 がそれぞれ別の VP 中に存するので、このような操作を許容する。

*そうし上がる、*押され開く

そうし終える、喋られ続け(てウンザリした)

影山の分析は非常に明示的であり、システムとしても優れているのだが、これらのテスト枠がうまく機能しないものがあることもよく知られている。

本博士論文は、まず、語彙的複合動詞・統語的複合動詞として一括されているものも、さらに下位区分されることを指摘する。そして、脳内辞書(mental lexicon)における意味のアクセスの働きを解明しようとする門田(2003)の「二重アクセスモデル」を援用することにより、複合動詞には、文字ユニット全体から、それに相当する語の意味を脳内辞書から検索する「直接ルート」(完全に語彙化したもの)と、文字ユニットを形態的に分解・分析し、その後に意味を検索する「間接ルート」の2種があるとする。そして、間接ルートは、さらに、V1/V2 が時間的に連続・融合しているものと、V2 が文法化しスロットを持つものに区分される。この結果現れるのが次の3分類である。

直接ルート: (a)レベル0複合動詞

間接ルート: (b)レベル1複合動詞

(c)レベル2複合動詞

この結論を導く論証は、「そうする」のみならず、「する/やる/なる」置き換えテスト、「テ」形テストその他を用いて実証的になされており、豊富な文例に基づく検証に大きな論理矛盾は見られない。また、複合動詞にはレベル間のシフトを起こすものが多々見られるが、この原因を文法化(grammaticalization)に求め、文法化を促進する原因として、語用論的推論(pragmatic inference)と意味の漂白化(bleaching)があることを指摘し、それらに関しても説得的な議論を展開している。総括的に言えば、影山(1993)モデルの利点を生かした上で、日本語複合動詞の実体にさらに迫るシステムを開発しており、挙げられている豊富な文例も、今後の研究に資するところ大であると高く評価される。

無論、細部においては問題がない訳ではない。試問の際に審査委員から指摘された問題点の幾つかを列挙しておきたい。

① 置き換えテストのうち「なる」テストに関する記述が比較的少なく、テスト枠としての地位が必ずしも明確ではない。また、影山の統語的複合動詞については、ほぼ影山分類を踏襲しているが、テスト枠をさらに精密化することで統語的複合動詞の位置付けがもっと明確になったのではないか。

② 本博士論文では「意味」の問題に特化したために、影山が詳細に論じている統語面の問題(特に項構造の継承)が十分に論じられていない。

③ 二重アクセスモデルは、基本的に文解析(sentence processing)モデルであり、これを援用した研究は、最終的には実験を必要とするものである。また、そのことに関連して言えば、文解析モデルではなく、より文法モデルに傾斜したモデルを構築した方がよかったのではないか。

④ 個々の例については、どのレベルに属するものかを決定するにあたり、考察が不十分であるものも見受けられる。

特に③については、本博士論文(の一部)を、より文法モデルに特化した論考に再編成し、学会誌などに投稿した上で客観的評価を受けることが求められた。

しかしながら、100%完璧な論文というものはあり得ず、特に科学的研究においては、一定の知見が得られたと判断された時点で成果を公表することが求められる。その意味においても、本博士論文は、日本語複合動詞の研究において十分な貢献をなし得るものと評価される。著者は、採択率が 50%を切る関西言語学会大会において4年連続で発表を行っており、その成果も『KLS』(関西言語学会 Proceedings)で刊行されている。また、日本語教育学会誌にも再投稿中の論文がある他、十分な数の研究誌に論文を公表している。

以上のことを総合的に判断し、審査委員会は、本博士論文が博士の称号に値する十分な業績であるという結論に達した。